

漢法苞徳塾資料	No. 135
区分	診察論・触診：補足
タイトル	<b>触診論</b> 皮肉・膈肉・血脈など
著者	八木素萌
作成日	1995.03.15

### ◎皮膚・肉・筋などの診察

A. 「健康な人の皮膚」と「病弱な人の皮膚」は、一見して区別できるように明瞭に異なっている。

「色」「艶」「張り」を視て力士の体調の可否を論ずるように、「皮膚」の状態は歴然と体調を現わしている。いわゆる「厚・薄・緩・急・剛・柔・硬・軟」などを診るのである。乳児の皮膚のように、薄くて柔弱な感じにさらに「ひ弱なもろい感じ」が加わっているものであり、透けて見える静脈は、如何にも頼りない色調で、僅かなことで溢血してそれが容易には消退・吸収されない。

皮膚の「厚さ」は手甲の皮膚を抓めば容易に観察できる。皮膚の「張り」は皮膚を抓んだ指を放せば、皮膚は元に戻るが、その戻る様子・時間などで観察できる。その戻り具合は「弾力」を示している。健康な人・回復力のシッカリした人強い人の皮膚は、ただ「厚い」のみではなく如何にも「シッカリ」している。そして、その色調は「艶」があり「かがやき」があるもので、たんに「色が白い」とか「色が黒い」などと言うことではない。「色」が浅薄にあって「艶」「深み」のないものは「陽病」とされている。「色」に輝きがない・くすんでいる・力がないのは、病弱であったり・[陰病]であるとされている。

B. 所謂、「血脈を診る」と言う場合の「血脈」とは、

『靈枢』九鍼十二原第1に「……持鍼之道・堅者為宝・正指直刺・無鍼左右・神在秋毫・属意病者・審視血脈者・刺之無殆。……」（……持鍼ノ道ハ堅ナル者ヲ宝ト為ス・正ニ指シテ直ニ刺シテ鍼ヲ左右スル無ク・神ニ在リテハ秋毫ニ・意ヲ病者ニ属セシムルハ・審ラカニ血脈ヲ視ル者ナレバ・之レヲ刺シテ殆マルコト無カラン。……）とあり、

『靈枢』寿夭剛柔第6には「……形充而脈堅大者順也・形充而脈小以弱者氣衰・衰則危矣。……」（…形充チテ脈ノ堅カツ大ナル者ハ順ナリ・形充チテ而シテ脈ノ小ニヨツテ弱キ者ハ氣衰ウルナリ・衰ウレバ則ワチ危ウキナリ。……）と述べている。

このように「血脈」を診ると言うことは、きわめて重要な診察課題となっている。

「血脈」とは勿論「血管」のことであるが、これは体表において観察できるものに他ならない。つまり、それは皮膚を透して観察可能な「静脈」以外には有り得ない。この状態を観察して体調などを判断するのである。

手甲の「血脈」の「太さ」と「色」がしっかりしている人は「丈夫」であるが、「血管が細くて採血を行ない憎いし、溢血しやすい」と健康診断などの時に言われるような人は、「血管」は細

く色合いも如何にも活力が無い感じである。身体が「弱い」のである。

筋力が十分にあり、活動的であれば、局所への血行が良い訳であるから、静脈血の心への還流も活発である。従って「色」も「太さ」も「シッカリ」として「丈夫そう」なのである。運動が足りず、動作も弱々しく、身体を内から暖める力が弱い、気力も乏しいような人の「血脈」は、「色」も「太さ」も如何にも「脆弱」なものである。

- C. 「病因」が「寒」であって、それにより「傷寒」に患った場合に「尺皮」の状態の変化して行く姿を思い起こして、それをヒントに「尺皮」診察のための考え方や態度のありようについて、考えて置こう。

「おー・寒い、風邪引きそう…!!」と言う段階では、皮膚の色は、白っぽく乾いた感じで如何にも寒々としている。暖かい飲み物や食事をし、十分に暖房が効いた部屋にくつろいだのに、「寒気」を強く感じて「熱でも出るのかな! どうも戦慄が来そうだ!!」と言う段階になると、首筋から肩へかけて凝りを強く感じている。そういうときには「尺皮はこわばった様子が前の感じに並行」して現われている。身体の方は「発汗」によって「寒邪」を排除しようとしないうのは、既に「寒邪」に冒されているから「悪寒」になっているのである。さらに進んでくると、「悪寒」が強くなり「戦慄」と「発熱」が始まっているが「無汗」の状態が続いて、もっと「熱が出そう」である。この段階になると、「頭痛」や「節々の痛み」を強く自覚し、体温の上昇が実際に始まっている。「尺皮」の様子の方には「数」と呼ばれている状態が。上記の状態に加わってくる。「発汗」が始まれば「数」の感じがもっと強くなり「こわばりが急速に消退して行き、皮膚色の方は赤黄色味が主な色に変化して行く。適切な治療と処置によって、「汗が出て熱が下がり、カラダが [ユルム]・[ノビヤカ] になって楽になった」と言う状態は、明らかに治癒しているが病の影響から体力の回復は未だしの状態である。このときは身体の消耗を表わして「尺皮」は「緩」の状態を見せる。

このように、病態の変化・生理的状況の変化に応じて、「尺皮」の状態も刻々に変化して行くのである。このような状況転換の早いスピードの変化は「脈」の変化の酷似している。そこには「病態的状态」の「寒・熱・労・風」などや「病因の五行」や「病態にとって主な役割を担っている五臓の役割の転換の様子」が、明らかに示されている。つまり「意味のオーバーラップ」「意味の転換」などが見られるのである。これは「尺皮診」に強く現れているものの如くである。しかし、それに限ること無く、四診総合の立場に立つ「漢法医学の診断学」にあっては、原理的に共通する面を持っているものであると言うべきであろう。

- D. 「尺皮診」において「五臓」と言う表現に込められている意味合いが、体表に表現されているところの「生理的・病理的状態の特性を認識している」と観察した表現とも言うべき角度が主要なものとなっている。つまり、身体の状態の「寒・熱・燥・湿・労」や、「陽虚」か「陽実」か? などにおいて、「血脈」や「皮毛腠理」が示している体調、生理的・病態的な状況などを、尺皮の示しているものから診察する方法となっている。

## ◎皮肉連接診

- A. 『甲乙経』「五臓大小六腑応候」中に「…皮肉不相離者大腸結…」(…皮肉ノ相イニ離レザルモノハ大腸ノ結ボレ…)とあるのが出発点になっていると思われる。この記述は『靈枢』本蔵第47からの引用文である。

『靈枢』のこの篇には「…皮厚者大腸厚…」(…皮厚キモノハ大腸厚シ…)とか「…心応脈・皮厚者・脈厚・脈厚者・小腸厚…」(…心ニ脈応ズ・皮厚キモノハ脈厚シ・脈厚キモノハ・小腸厚シ…)・「…密理厚皮者・三焦膀胱厚……疎腠理者・三焦膀胱緩…」(…理<sup>きめこまか</sup>密ク皮厚キモノハ・三焦膀胱厚シ・……腠理疎キモノハ三焦膀胱緩シ……)などのような記述が見られる。

また、『靈枢』本蔵第47には「……経脈者・所以行血氣而営陰陽・濡筋骨・利關節者也。衛氣者・所以温分肉・充皮膚・肥腠理・司開闔者也。志意者・所以御精神・収魂魄・適寒温・和喜怒者也。是故血和則経脈流行・営覆陰陽・筋骨勁強・關節清利矣。衛氣和則分肉解利・皮膚調柔・腠理緻密矣。志意和則精神專直・魂魄不散・悔怒不起・五蔵不受邪矣。寒温和則六府化穀・風痺不作・経脈通利・肢節得安矣。……」(……経脈ハ血氣ヲ行ラセテ陰ト陽ヲ営シ筋骨ヲ濡ホシ關節ヲ利スル所以ノ者ナリ。衛氣ハ分肉ヲ温メテ皮膚ヲ充タシ腠理ヲ肥ヤシ開闔ヲ司サドル所以ノ者ナリ。志意ハ精神ヲ御シテ魂魄ヲ収シ寒温ニ適ワシメ喜怒ヲ和スル所以ノ者ナリ。是ノ故ニ血和ストキハ経脈ハ流レ行グリテ陰ト陽トヲ営シ筋骨ハ勁強トナリ關節ハ清利ナリ。衛氣和セハ分肉ハ解利ニ皮膚ハ調柔ニ腠理ハ緻密ナリ。志意和スレバ則チ精神ハ專直ニ魂魄ハ散ズルナク悔怒ハ起ラズ五蔵ハ邪ヲ受ケザルモノナリ。寒温和セバ則チ六府ハ穀ヲ化シ・風痺ヲ作サズ・経脈ハ通利シテ・肢節ハ安ンズルコトヲ得ルナリ。……)とあり、

『靈枢』寿夭剛柔第6には「……皮与肉相果則寿・不相果則夭。……」(……皮ト肉ト相イニ果ナルトキハ寿・相イニ果ナラズバ夭……)「……形充而皮膚緩者則寿・形充而皮膚急者則夭……」(……形充チテ皮膚緩キモノハ則チ寿・形充チテ皮膚急ナルモノハ則チ夭……)とも述べている。

『難経』四十六難に「……少壯者・血氣盛・肌肉滑・氣道通・榮衛之行不失于常……老人血氣衰・肌肉不滑・榮衛之道澹……」(……少ク壮ナル者ハ・血氣モ盛ンニシテ肌肉滑ラカニ・氣道通ジテ榮衛ノ行リハ常ナルヲ失ワズ……老人ハ血氣衰エテ肌肉滑ラカナラズシテ榮衛ノ道ハ澹レリ……)とある。

これらのように皮毛腠理の疎密や、皮の厚・薄・緩・急などで臓腑の状況などが判断されることが記述されている。

これらの記述が出発点となっていることは間違いないであろう。

B. 皮膚の厚薄緩急の診と、臑（中之）肉の大小堅軟堅・細薄と敦厚の診、皮肉の連接などを診るための手技をめぐって

イ. 皮膚

〈厚・薄〉 手甲の皮膚を抓めば、その厚・薄が計りやすい。数量的に調べる場合も、その抓んだ所の、なるべく近い部位を計れば良い。

〈緩・急〉

〈弾力の強弱〉

〔図〕

ロ. 臑（中之）肉

〈大・小〉 〈堅・軟〉 〈敦厚・細薄〉 〈充緊・柔弾〉

ハ. 皮肉の連接を診る部位と手法

上膊 〈上腕〉 背下面

前頸 〈アゴ・廉泉穴の前後〉 上部

腹部 〈大腹・眇部〉